

序曲『海の静けさと幸福な船旅』は、メンデルスゾーン（1809-1847）が1828年に作曲したもので、1835年になって彼自身の指揮によりライプツィヒで初演された。この曲は、文豪ゲーテが1787年にシチリア島を旅したときの回想をもとに書いた二つの短詩に着想して作曲されたものである。二つの短詩は、静かな暗い海を表している「海の静けさ」でありいま一つは明るい活動的な海を表している「幸福な船旅」である。序曲の構成も前半部の「海の静けさ」の部分は、瞑想的な旋律が弦楽器で演奏されるアダージョであり、後半部の「幸福な船旅」は軽快な感じのするソナタ形式のモルト・アレグロ・エ・ヴィヴァーチェである。そもそもメンデルスゾーンは、この場合のソナタ形式にまた表題の「序曲」にあるように古典派的な表現方法を採用しているように思われてきた。がしかし、彼のメンタリティーはすでに次代のそれを示しており、このソナタ形式はとてものびやかな形式観を踏まえているし、また「序曲」は交響詩と云っても良いくらいにその内容を完備していると、聞こえる。

バレエ組曲『白鳥の湖』は、チャイコフスキー（1840-1893）によって1876年4月に作曲された同名のバレエからの組曲風の抜粋で、彼自身による編曲ではない。したがって、バレエ中の音楽が適宜に取り出されて組み合わされたもので、本日の上演もA. Winter 編のものに数曲加筆したかたちになっている。元来バレエ『白鳥の湖』自体もオリジナルは、四幕に作曲されているが、振り付け師により幕数も改編される事があり、その意味では演奏上の許容度が非常に高い作品であろうと思われる。バレエ音楽としての『白鳥の湖』は初演当時好評を博したとは決して云えないが、それでも音楽史上重要な意味をしめる作品である。つまり彼は、舞踏音楽バレエが「不条理な運命がテーマとなった心理的ドラマを表現できる」ことを明らかに、このバレエ音楽で示したのである。若き王子ジークフリートと白鳥に身を変えられたオデット姫との悲恋物語がそのテキストである。

『交響曲第七番ハ長調』は、シューベルト（1797-1828）が『未完成』に遅れること足掛け七年の後に、つまり1828年に作曲したものである。これは彼の死の九ヵ月前のことである。初演は、作曲から十年を経た1838年にシューマン兄弟の尽力により実現し、メンデルスゾーンの指揮でライプツィヒにおいて行われた。正確には『未完成』が第七番めの交響曲でありこの『ハ長調』交響曲は第八番めの交響曲である。つまりそこにはシューベルト研究経緯における誤謬があったわけである。従来は『未完成』を第八交響曲とし、また『ハ長調』交響曲を第七番もしくは第九番として一般的には呼ばれてきたのである。

作品全体は、四つの楽章からなっており、はじめの三つの楽章は繰り返しテーマの現われる連環形式で書かれ、終楽章はソナタ形式で書かれている。つまり全楽章が手堅い古典的な形式で書かれていることになる。この形式的な面だけから見ても『ハ長調』交響曲は『未完成』の女性的な抒情性よりも男性的な活気が強く現われていると思われる。がその形式観は、モーツァルトのそれではなく、ベートーヴェンの形式観に似ている。シューベルト研究者の間では、ブラームスの交響曲第一番ではなく、この『ハ長調』交響曲を挙げてベートーヴェンに連なる第十番目の交響曲と呼ぶことがあるようだ。音楽史上の古典主義やロマン主義の狭間にある幾人かの偉大な作曲家は、時にどちらか一方の主義をその作品に盛り込み、またある時はどちらの主義も同居させたりするのである。これが音楽の難解なところであり、理論と実際の相異であり、彼らの偉大なところである。ただ一つ云えることは、理想家の持ち合わせるあらゆる美、悲壮美、壮大美、荘厳美、厳粛美等は現実家にとってはある程度滑稽感を伴うものであると云うことである。シューベルトは、理想家でありながら『ハ長調』交響曲では自ら現実家に成ろうとした。ここにこの作品に対する様々な批評もあれば、評価もあり、面白さもあるのだ。

（藤井部 勉）